

ゲーテと芭蕉とリルケ

外村 完 二

周知の如く、ゲーテは獨逸の文豪である。彼は人間領域のあらゆる方面に活躍した。政治家としても偉大であつたし、動物學者として骨の研究もしたし、或ひは色彩論、植物の Metamorphose の問題、消防の改善等をも論じてゐる。藝術家としても、書簡體の小説から純粹な小説 Faust の如き大作から小劇に至るまで、あらゆる分野に及んでゐる。

ゲーテの偉大さに比すると、芭蕉やリルケはいかにも小さい。一體藝術家には偉大なあらはれ方をすると「純粹」を追求するものとの二つの typical なあらはれ方がある様であるが、芭蕉やリルケは、後者に屬するといふべきであらう。芭蕉は一層純粹性を求めた抒情詩人であり、風流の道に dämonisch なものを見出さんとしたのであつたが、リルケも又詩的 Damon にとりつかれ、いやが上にも純粹に、いやが上にも言葉少く、峻厳で、苦行的な——さうしていは

骨だらけの言葉に神通力を興へる——さうした風の詩人であつた。この三者について、平易に手がかりを得られる點について考へてみたい。詩人にとつて最も肝腎で最も取扱ひにくいのは言葉であらう。といふのは、言葉は日常的なものであると共に、藝術的表現の道具でもあり、日常的なる言葉を、詩の材料となる言葉として移し入れることがなかなかの難事であるからであり、この素材としての言葉は、恰も彫刻家の用ゐる大理石の様な——いや、Schiller のいふ如く、全く手におへない、ぼろ／＼になつた大理石の様なものであるからである。今一つは詩の中にある形式の問題であるが、詩の中には實に多くの形式があり、その何れをとり、何れを棄てるか、難しい問題だといへるであらう。

處で彼等三人はともに先づその天才的な力によつて言葉を自由に引きつけて自在に歌ひこなしてゐる事が見られる。しかし自由にといふことが、感情が對象に密着している態度であるならば、それは眞の自由ではないと言へるだらう。最初にゲーテの場合、古典形式のみに縛られ

てゐる。いやむしむ縛られることを自ら引受け、自らその中に飛込んで行つたといふ感すらある。それは、彼の後年に於ける東洋的なものを取入れて、いはゞ力だめしをするといふ様な傾向のうちにも見られるのであるが、同様のことはリルケや芭蕉に於ても見られる。リルケは稀に見る早熟で、早く詩の體を成した人であつたが、後に自國語を棄て、フランス語によつて詩を作らうとしてゐること、また、芭蕉は漢詩體の俳句を作ることによつて、新しい形式を充たさんとしてゐるのである。

彼等は最後には、自由の世界に入つたと見られる。即ち、ゲーテはその人生觀の完成に於て、リルケはその人生目的たる純粹に美しく生きることに於て、更に芭蕉は、放浪吟遊の自在な生活に於て。其處では、形式からは全く自由となり、先に見られた感情と對象とを密着させようとした態度から離れて、對象そのものの中に立入り、自由無碍な立場に迄至つたと思はれる。それは國民的なものから外國的なものを通じて再び國民的なものに還つたとも言ひ得よう(八十五頁へ)

いて」……………川川 信元

一、「十八世紀西歐思想成立過程につ

二、「『西東詩集』」の背景」

……………多田 祐一

三、「ゲーテの詩鑑賞」

……………岸 繁一

大庭、中島教授以下學生七名出席。午
前十一時半より午後二時半まで有意義
の裡に會を閉ず。

國史學會

◇十月二十九日 桂・修學院離宮拜觀、

柏原講師以下學生十餘名。

◇十一月七日 史跡踏査

大原方面、大原三千院、勝林院、來迎
院を見學ののち、寂光院に歩を運ぶ。

柏原講師以下學生十餘名。

◇十一月二十一日 史跡踏査

南山城方面、覺滿寺、高麗寺、錢司、
恭仁、角田講師引率學生二十名參加。

◇昭和二十九年國史學會大會

講師及び題

神と佛に就いて（神佛關係の一考察）

京都大學教授 柴田 實氏

平田篤胤に於ける佛敎批判の性格

本學講師 柏原 祐泉氏

◇十二月四日 史跡踏査

滋賀縣岩根村方面、善水寺、正福寺、
永源寺、菩提禪寺を見學。とくに善水
寺では降雨により雨傘をお借し願ひ、
厚く謝意を表す。また本尊體內發見
のモミ種を頂戴したことは印象に残
る。

國文學會

◇十月二十四日(日) 例會

謠曲における「クセ」の意義

波多野國豐

破調句について 山本 唯一

◇十月三十日(土) 三十一日(日)

伊賀上野方面研究旅行

參加者 岩見教授、山本助教授、湯岡
副手學生十名。

コース 京都―八木―長谷―名張―上
野(一泊)―木津―京都

なお前日研究室にて次の研究發表を行
つた。

長谷寺縁起 豊田 尊

長谷信仰 雲根 智

物語と長谷 山本 唯一

日記文學と長谷 渡邊 貞麿

長谷と和歌 近藤 達男

名張について 伊藤 義弘

芭蕉と伊賀 首藤 靜雄

蕉門と伊賀 藤井 混丸

(七八頁より)し、又他の藝術を以て之
に適應させるならば、繪畫的なものから
彫刻的なものへ、更に音樂的なもの――
音樂の持つ自由な性格と言ふ意味での
――へ高められたとも言へるであらう。